

縄文時代人骨の分析

小竹貝塚の概要

本遺跡は、富山市街地から北西約4kmの呉羽町北地内にあります。北方約4kmは富山湾です。

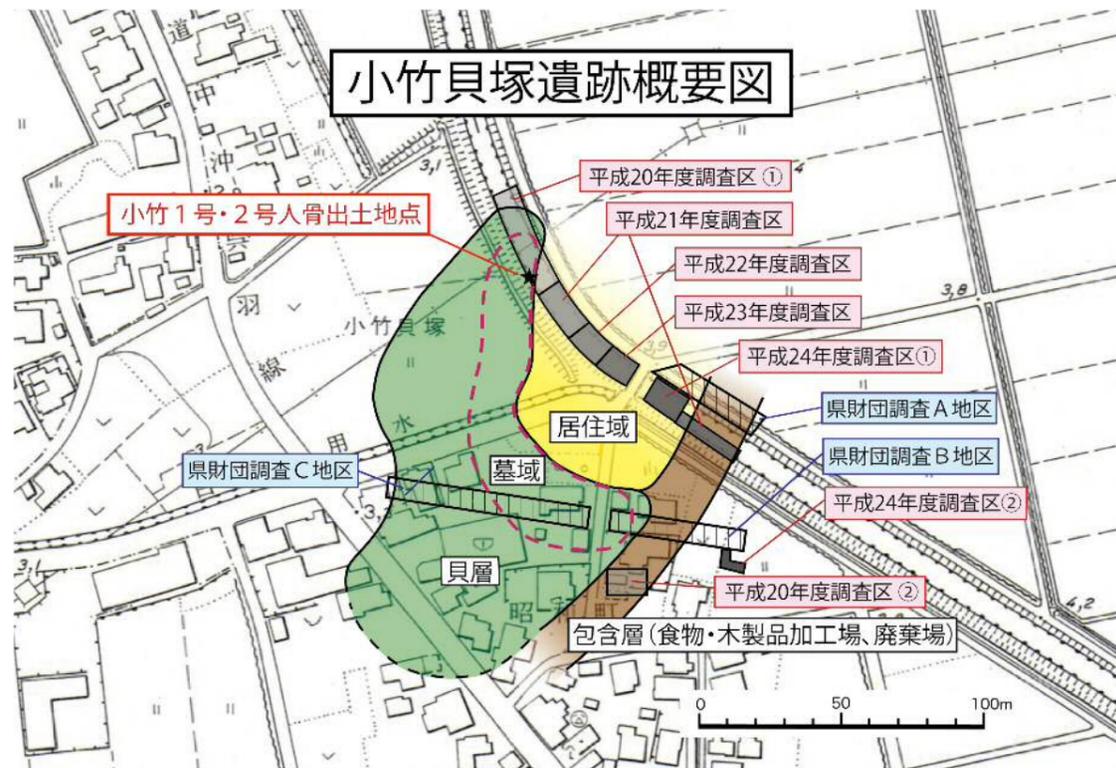
本遺跡は、長岡台地の北西に広がる沖積地に立地し、標高は2.5～3.5mです。約6,000～5,000年前には、縄文海進により旧放生津潟が広がり、その縁辺部に本遺跡が形成されました。

2010年、公益財団法人富山県文化振興財団埋蔵文化財事務所（以下、県財団）が行った北陸新幹線建設工事に先立つ調査で、縄文時代前期では全国最多の人骨が発見され、全国から注目されました。2014年3月にその調査成果が報告されています〔県財団2014〕。

2008年、富山市埋蔵文化財センターが新鍛冶川改修工事に先立つ調査を行い、2個体の人骨を発見しました。その人骨と1991年調査で発見されていた人骨について、国立科学博物館名誉研



小竹貝塚位置図



小竹貝塚遺跡概要図

究員 溝口優司氏（高岡市出身）が形態分析を行い、その結果をこのたび、日本人類学会誌に「小竹貝塚1号人骨と縄文時代中・後・晩期近隣諸地域集団との関係」と題して発表されました。

小竹貝塚の出土人骨数（2014年現在）

溝口氏が小竹貝塚の過去の調査で出土した全ての人骨をはじき出したところ、人骨の確実な最小個体数は、100個体であることが分かりました〔溝口2014a〕。

調査年	機関	個体数	性別			備考
			男	女	不明	
1971	県	1	1			
1991	市	2	1		1	
2008	市	6		③	3	小竹貝塚1号人骨は女性。
2010	県財団	91	35	18	38	土器棺4個体は、性別不明に含む。
計		100	37	20	43	

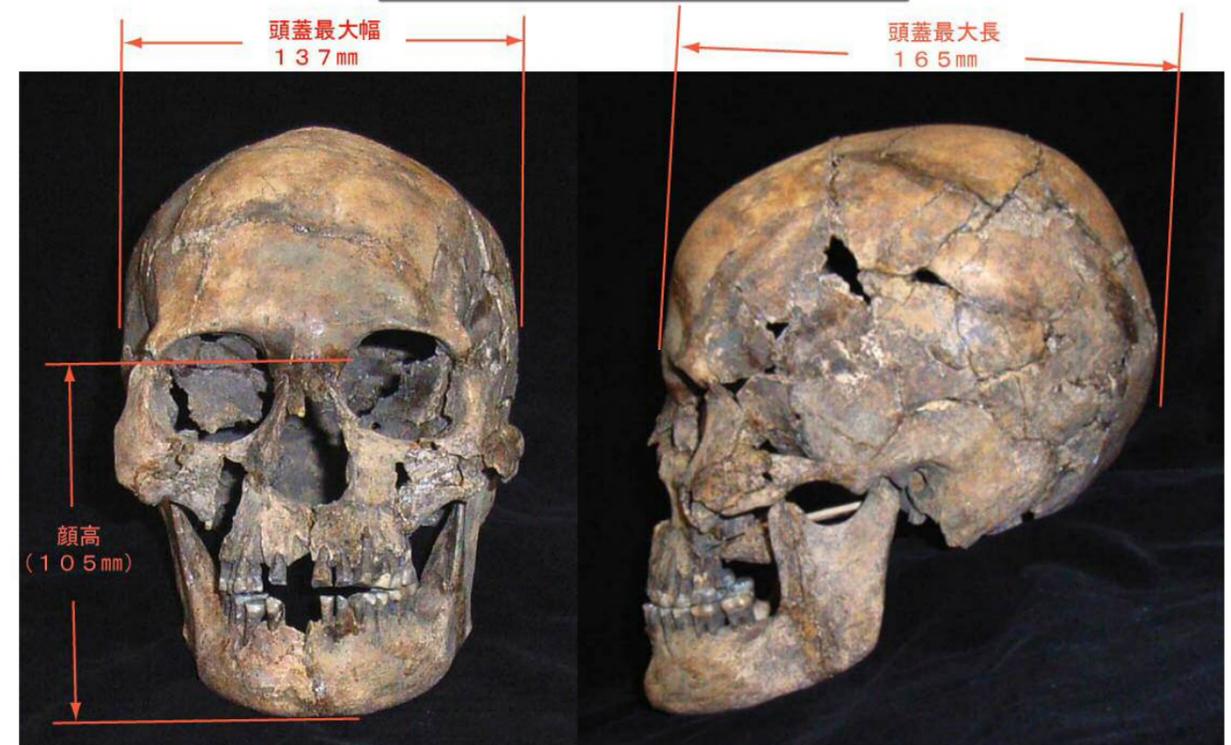
これまでの小竹貝塚1号人骨の分析成果

国立科学博物館での復元・分析の結果、復元した小竹貝塚1号人骨頭骨の大きさは、**頭蓋最大長（頭の前後径）=165mm、頭蓋最大幅（頭の横幅）=137mm、顔高（鼻の付け根から下顎の下端まで）=約105mm**を測ります。

性別は、頭蓋の特徴から**女性**です。

年齢は、歯の磨り減り具合などから**熟年～老年（40～60歳以上）**です。

小竹貝塚1号人骨計測データ



小竹貝塚1号人骨（左：正面観 右：側面観）

溝口氏の研究論文骨子

小竹貝塚1号人骨の形態分析

溝口氏は、2008年に発見された縄文時代前期の女性頭蓋である小竹貝塚1号人骨と近隣諸地域集団との類縁関係を、頭蓋計測値に基づく典型性確率*によって検討しました

※典型性確率…ある個体が比較しようとする集団でどのくらい典型的かを確率として示すもの。

分析1 小竹貝塚1号人骨と縄文時代中・後・晩期集団

小竹貝塚1号人骨は、日本列島4地方（東北・関東・東海・山陽）集団の中では東北地方の縄文時代中・後・晩期人女性集団に最も近い（似ている）。

分析2 東北縄文時代中・後・晩期人女性集団と他地域縄文時代早・前期個体標本

小竹貝塚1号人骨が最も似ていた東北縄文時代中・後・晩期人女性集団は、小竹貝塚1号人骨よりも北海道の北黄金K13(女性)個体がもっとよく似ている。

分析3 北黄金K13個体と外国の縄文時代後・晩期相当期の集団

北黄金K13は、東北縄文時代中・後・晩期人女性集団よりも中国の安陽青銅器時代人集団や東南アジアの新石器-鉄器時代人集団にもっとよく似ている。

分析4 東北地方縄文時代前期個体標本と縄文時代中・後・晩期人集団

東北地方縄文時代前期の青森の古屋敷(女性)個体は、東北よりも山陽の中・後・晩期人女性集団に似ている。

分析5 山陽縄文時代前期個体標本と東南アジア新石器-鉄器時代人集団

山陽地方縄文時代前期の岡山の羽島2(男性)個体は、日本列島内よりも東南アジア新石器-鉄器時代人男性集団に似ている。ただし、北黄金K13とは違って、中国の安陽青銅器時代人集団には全く似ていない。

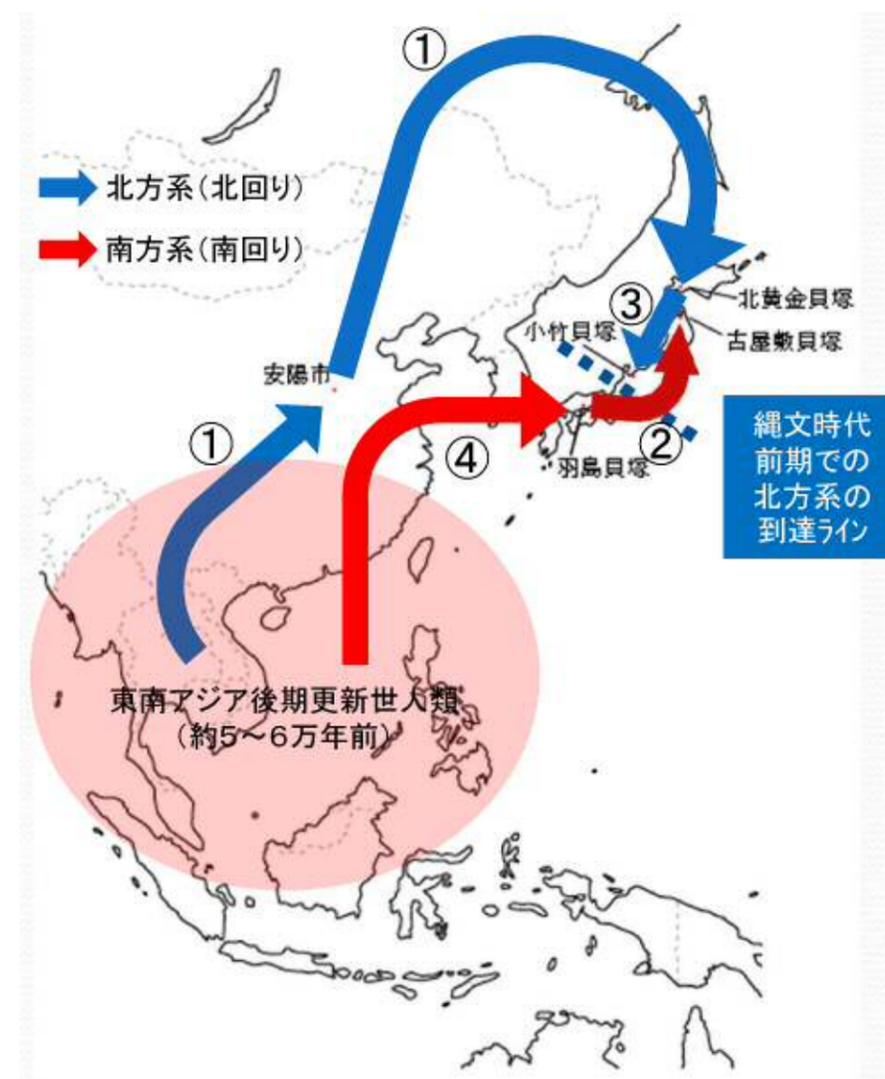
縄文時代人の祖先の日本列島への移住・拡散について（試行的考察）

上記の分析結果から、縄文時代人の祖先の日本列島への移住・拡散について、次のように考察してみた。

- ①縄文時代以前に東南アジア新石器-鉄器時代人に似た人々がアジア大陸を北上して安陽青銅器時代人に似た人々になり、さらに北上、東進、南下して北海道に入り、北海道の縄文時代前期個体、北黄金K13のような縄文時代人になった。
- ②一方で、縄文時代前期までに、山陽縄文時代中・後・晩期人に似た人々が南から東北地方にまで到達していた。
- ③そして、北黄金K13に似た人々が、やはり縄文時代前期までに、さらに南下して東北から北陸地方にまで至り、当地（小竹貝塚）の縄文時代人になった。
- ④ただし、この北方系の縄文時代人は、縄文時代前期の時点では、山陽地方にまでは到達していなかった。縄文時代前期の山陽地方には東南アジアの新石器-鉄器時代人に似た人々が住んでいた。

この試行的考察はわずかな1個体の標本に基づく仮説的な筋書きである。よって、今後は北陸・東北・北海道さらには周辺アジア地域の当該期の集団の分析結果を蓄積して、今回の試行的な考察を確認していく必要がある。

縄文時代人の祖先の日本列島への移住・拡散概念図



〔溝口 2014b〕を基に、富山市埋蔵文化財センターが作図

今回の分析・研究の意義

溝口氏の小竹貝塚1号人骨の形態分析によって、縄文時代人の祖先の日本列島への移住・拡散も含む、縄文時代早・前期相当期におけるアジア人の移住・拡散過程について非常に興味深い見通しが得られました。

この分析により 日本人のルーツ解明に向けた研究が、新たなステージへ進んだこととなります。

<参考文献>

- 公益財団法人富山県文化振興財団埋蔵文化財事務所 2014 『小竹貝塚発掘調査報告 第三分冊 人骨分析編』
溝口優司 2014a 「2 人骨発見小史」『小竹貝塚発掘調査報告 第三分冊 人骨分析編』公益財団法人富山県文化振興財団埋蔵文化財事務所
溝口優司 2014b 「小竹貝塚1号人骨と縄文時代中・後・晩期近隣諸地域集団との関係」『Anthropological Science (Japanese Series)』122巻1号 日本人類学会

編集・発行 富山市教育委員会埋蔵文化財センター